

## 初瀬の霊夢

春秋過ぎて、九月ばかりに初瀬に籠りて、七日といふ、夜もすがら行ひて、暁がたに少しまどろみたる夢に、やんごとなき女、そばむきて居たり。さし寄りて見れば、わが思ふ人なり。うれしさ、せんかたなくて、「いづくにおはしますにか。かくいみじきめを見せ給ふぞ。いかばかりか思ひ嘆くと知り給へる。」と言へば、うち泣きて、「かくまでとは思はざりしを。いとあはれにぞ。」と言ひて、「今は帰りなん。」と言へば、袖をひかへて、「おはしまし所、知らせさせ給へ。」とのたまへば、

わたつ海のそのことも知らずわびぬれば住吉とこそあまは言ひけれ

と言ひて立つを、ひかへて返さずと見て、うちおどろきて、夢と知りせばと、悲しかりけり。

さて、仏の御しるしぞとて、夜のうちに出席で、住吉といふ所尋ねみんとて、御供なる者に、「精進のついでに、天王寺、住吉などに参らんと思ふなり。おのおの帰りて、この由を申せ。」と仰せられければ、「いかに、御供の人なくては侍るべき。捨て参らせて参りたらんに、よきこと候ひなんや。」慕ひあひけれども、「示現をかうぶりたれば、そのままになん。ことさらに、思ふやうあり。言はんままにてあるべし。いかに言ふとも、具すまじきぞ。」とて、御隨身一人ばかりを具して、浄衣のなえらかなるに、薄色の衣に白き単着て、藁沓、脛巾して、竜田山越え行き、隠れ給ひにければ、聞こえわづらひて、御供の者は帰りにけり。

住吉には、その暁、姫君の、御跡に臥したる侍従にのたまふやう、「まどろみたりつる夢に、少将のたまふやう、心細かりつる山の中に、ただひとり草枕して、起き臥し給ふ所に行きつれば、我を見つけて、袖をひかへて、

尋ねかね深き山路に迷ふかな君が住みかをそこと知らせよ

となんありつる。」と、あはれに語り給へば、侍従、「げにいかばかり嘆き給ふらん。まことの御夢にこそ侍れ。あはれとおぼさずや。」と聞こゆれば、「石木ならねば、いかでか。」など言ひつつ、あはれげにおぼしたりけり。

中将は、ならばぬさまなれば、藁沓にあたりて、足より血落えり。行きやらぬ気色なれば、道行き人、あやしき者ども、目をつけてぞ見合ひける。さても、泣く泣く、酉の時ばかりに、はるばると並み立てる松の一むらに、芦屋ところどころにありて、海見えたる所に行きつき給ひぬれども、いづくとも知らず、思ひわづらひて、松の下に休み給ひけるに、十あまりなる童、松の落ち葉拾ひけるを呼び給ひて、「おのれは、いづくに住むぞ。このわたりをば、いづくといふぞ。」と問へば、「住吉となん申す。やがてこれに侍るなり。」と言へば、いとうれしきことと聞きて、「このわたり

に、さるべき人や住む。」と仰せられければ、「神主の大夫殿こそ。」と言へば、「さても、京などの人の住む所やある。」と仰せらるれば、「住江殿と申す所こそ。京の尼上とて、おはする。」と言ひければ、こまかに尋ね問ひて、行き給ひたれば、江に作りかけたる家の、ものさびしき夕月夜、木の間よりほのかにさし入りて、をさをさしき人も見えぬ、いとものははれなり。

【口語訳】

春秋が過ぎて、九月ぐらいに初瀬に参籠して、七日目という(満願の日に)、夜通し勤行して、暁がたに少しまどろんだ夢に、高貴な女性が、横を向いて座っている。近寄って見ると、(中将)自身が思いを寄せる人である。うれしきは、どうしようもなく、「どこにいらっしやるのですか。このようにひどい目を見せなされることだよ。どれほど(私が)思い嘆いているか(あなたは)ご存知ですか(ご存知ないでしょう)。」と言うと、(姫君は)泣いて、「これほどまで(あなたが思ってくたさる)とは思いませんでした。たいそうしみじみ感慨深く(思います)。」と言って、「今はもう帰ります。」と言うので、(中将は)袖を(押さえて)引きとめて、「いらっしやる所を、お知らせください。」とおっしゃると、

海の底とも(そこが)どこともわからずわび住まいをしていたところ、住みよい所だと海人は言い、住吉という所だと尼上は言うのですよ。

と(姫君が)言つて立ち去るのを、(中将は)引きとめて帰さない(という夢を)見て、目を覚まして、夢と知っていたならば(覚めないままでいたのに)と、悲しかった。

そうして、仏の靈験だということで、夜のうちに出立して、住吉という所を訪れてみようと思つて、御供である者に、「(初瀬参籠という)精進の機会に、天王寺、住吉大社などに参詣しようと思ふのだ。みんな帰つて、この事情を(父右大臣に)申し上げよ。」とおっしゃったところ、「どうして、御供の人がいなくてよいでしょうか。置き去りに申し上げて(お邸に)帰参したならば、よいことがあるでしょうか(いや、ないでしょう)。」と(一緒に行きたがつて)みんなで慕つたが、「示現をいただいたので、その通りに(するのだ)。特別に、思うところがある。言う通りにせよ。たとえどれほど言つても、連れてゆくつもりはないぞ。」と言つて、御隨身一人だけを連れて、浄衣で柔らかくなつたものに、(下に)薄色の衣に(さらにその下に)白い肌着を着て、藁沓(を履き)、脛巾をつけて、竜田山を越えて行き、(姿が)見えなくなりなつたので、(それ以上は)申し上げかねて、御供の者は帰つた。

住吉では、その暁、姫君が、御前近くに寝ている侍従におっしゃるには、「まどろんでいた夢で、少将がおっしゃるには、もの寂しかった山の中で、(少将が)ただ一人で旅寝をして、寝起きしなされる所に(私が)行ったところ、(少将が)私を見つけて、(私の)袖を(押さえて)引きとめて(おっしゃるには)、

(あなたの居所を)探し当てることができなくて深い山道に迷い込んだなあ。あなたの住みかをどこそだと知らせてください。

ということでした。」と、しみじみ感慨深く語りなされるので、侍従は、「本当に(少将は)どれほど嘆きなさっているでしょうか。正夢でございます。お気の毒にお思ひになりませんか(お思ひになるでしょう)。」と申し上げると、「石木ではないので、どうして(気の毒に思わないだろうか、いや、思います)。」などと言つては、しみじみ感慨深そうに思つていらっしやつた。

中将は、(徒歩で旅をするという)慣れない状況なので、藁沓にこすれて、足から血が流れ落ちてゐる。歩き通せそうにない様子なので、往来する人や、身分の低い者どもが、目をとめてみんなで見つた。そういう状態で、泣く泣く、午後六時頃に、はるばる遠くまで並んで立っている松の一群(の中)に、芦屋がところどころにあつて、海が見えている所に行き着きなつたが、(そこが)どこであるともわからず、思い悩んで、松の下で休みなつていたところ、十歳あまりである童が、松の落ち葉を拾つていたのを呼びなかつて、「おまえは、どこに住むのか。この辺りを、どこというのか。」と問うと、「(この辺りは)住吉と申します。(私は)ほかでもなくここに(住んで)おります。」と言うので、たいそう嬉しいことだと(思ひながら)聞いて、「この辺りに、しかるべき(身分の)人は住んでいるか。」とおっしゃったところ、「神主の大夫殿が(住んでおられます)。」と言うので、「それはそうとして、京などの人が住む所はあるか。」とおっしゃると、「住江殿と申します所が(ございます)。京の尼上という名で、(住んで)いらっしやいます。」と言つたので、くわしく問い尋ねて、行きなつたところ、入り江にかかるように造つてある家が、ものさびしい(そのような)夕月夜に、(その月光が)木の間からほのかに差し込んで、しつかりとした(主らしき)人も見えず、たいそう何ともしみじみ感慨深く思われる。